

『古今著聞集』卷第四（文学第五）について

三宅祐子

はじめに

建長六年（一二五四）、橘成季によって編著された『古今著聞集』は、勅撰和歌集を編纂の上での手本としてい
るらしく、二十巻、三十編に分類され、しかも七二六の説話がほぼ事項の年代順に配列されているという、構成が
整然としたものである。また、王朝文化へのあこがれが感じられ、古今の著名な説話を含み、取材の範囲が広いも
のでもある。このように『古今著聞集』は、説話集としての多くの魅力があり、時には『今昔物語集』や『宇治拾
遺物語』と並び称せられながら研究した文献は、比較的少ないのである。私は、『古今著聞集』に興味を持ったも
の、しかし、直接全面的に研究するのは容易なことではないと感じた。そこで、『古今著聞集』の巻のうち、最
も『和漢朗詠集』からの影響が多くみられる巻第四（文学第五）を研究していくことにした。

一、類話関係

まず、『古今著聞集』卷第四（文学第五）の一〇六段から一四一段という三十六章段において、それぞれ説話文学作品の中にある類話とその内容を「資料一」として表に示した。そして『和漢朗詠集』と何らかの関わりが認められた章段は○印を付した。

△資料一▽ 類話関係

和	章段番号	類	話	内	容
○	一〇六				伏羲（儀）氏初めて書契を作る 応神天皇の御代に百済国の博士経史を日本に持ち来る 朝綱 天曆六年十月、夢に白樂天を見る 文時・朝綱の二人期せずして同一のものを文集第一の詩として進む 或人、安樂寺にて、天神が直衣にて相規の詩を吟ずるを見る 奮然、入唐して直幹の詩を改めて自作と称するを唐人によりもとの如く正さる 渤海人、朝綱の「前途程遠」の句に感じ、朝綱の三公に至らざるを不審とす 竹生島弁才天、良香の「三千世界」の詩の下句を付く
○	一一一	江談六・三三六			
○	一一二	江談四・三三二			
○	一一三	江談六・三三六 袋四・四五 撰集八・四四五	江談四・三一七 十訓一〇・一四六		

○	一一四	江談四・三二二
○	一一五	
○	一一六	江談四・三一九
○	一一七	江談六・三三六 十訓一〇・一四七
	一一八	
	一一九	江談五・三三五 続古二・二二三 十訓一・一七
	一二〇	
○	一一一	袋四・六九 江談六・三三九 十訓一〇・一四七
○	一二二	
○	一二三	

爲憲文場毎に抄筆を入る所の書囊（詩・土囊）を持つ
後徳大寺実定、宝莊嚴院にて詩歌合を行ふ
元稹の靈、琴を弾ずる隱君子の許に現れ、己の「不是花中」の詩中の一語を改む
文時 隴山雲暗の句により疫病を遁る
保胤 六条宮にて匡衡・斉名・以言、及び自己の文章を評す
匡房 高麗より医師を乞ひし返牒に「雙魚難逢」の詩を読む
匡房 康和三年、夢想により安樂寺の祭を行ふ
匡房 曲水宴序中の失誤を夢の告げによりて匡す
匡房 安樂寺に於ける曲水宴の序文を書き、披講するに御廟鳴る
匡房 嘉承二年、天神の計により再び都督となる
唐に於ける尚齒会の起源
日本に於ける尚齒会の始めは年名の行へるものなり
在衡、尚齒会を行ふ 天承元年の宗忠の尚齒会の様
在良、侍読として、初めて鳥羽院の御前に出でて朗詠し、故事を語り管絃す
隆頼、文撰及び四声の切韻暗誦を以て、勸学院の酒宴の時、学生達の上座に着く
隆頼、勸学院の学頭になる

○		○	
一三三	一三二	一二九	一二八
		一二七	一二六
		一二五	一二四

隆頼、学問料を心にかけて秀句の申文を書けども果さず
 頼長、甲子革命の為周易を学ばんとして泰山府君を祀る
 宋の商客劉文冲、書籍名籍を頼長（宇治左府）に献ず
 頼長、院宣により学問料の試を行ひ、光範、登宣合格す
 崇徳院、学問料の試につき、信西（通憲）に申し合はせ給ふ
 重憲 保元二年の藏人所の直講の試に失敗す
 敦周、信西の家の詩会に「第一第二絃索案」の心に合ひたる秀句を詠ず
 実定 納言にて昇進止り、後に左大将となる
 実定、左大将になりし時、釈奠にて述懐の詩を作る
 永範、実定（後徳大寺）の左大将になりし時、釈奠の席にて作りし詩に感激す
 治承二年内裏御作文の時の御製に永範、俊経感激す
 高倉院 風月の才にすぐれ給ふ
 高倉院 治承二年六月、中殿にて御作文をし給ふ
 中宮大夫隆季、治承の中殿御作文に高倉天皇の御製と作り合はす
 高倉天皇
 長方に対して天気不快なり
 定長 為長の夢想到依り、北野宮にて臨時作文を行ふ
 素俊、警句により或人の得意の句を茶化す

一三四	十訓五・六四 因縁九・一六三	素俊 連句の上手にて「春調春鷺轉」の句を詠ず
一三五	十訓五・六四	枇杷 大納言延光、村上天皇を慕ひて一生喪服を着る
一三六	古事一・一六 十訓五・六五	延光 夢中に故村上天皇の御詩を賜り、和し奉る
	十訓六・七九	後三条院 東宮の御時学士夷政の甲斐守となりて赴任するに、 一州民縦為「甘棠詠」の詩并びに「わすれずは」の歌を賜ふ
	統往二〇 袋三・五二 発心五・九九 今昔一九・九一〇 大系四・九七 撰集四・三七六 古事一・一四七 十訓六・七九	顯基 後一条天皇の時 時めく
	統往二〇 今昔一九・九一〇 発心五・九九 大系四・九七 発心五・九九 撰集四・三七六 十訓六・八〇	顯基 後一条天皇（一条天皇 後冷泉天皇）の崩御により出家し、楞嚴院に上る
一三七	十訓六・八一	顯基 常に「古墓何世人」の詩を誦す
	宝物二・四〇 宝物一七 十訓六・八一	道真 「君富春秋臣漸老」の詩を詠み 叡感に与かりて御衣を賜る
	十訓六・八一	道真 時平の讒に逢ひ 筑紫に流された後靈（雷）となる
一三八	宝物一・一七 十訓九・一四〇	道真 太宰府にて「去年今夜」の詩を詠む
一三九	十訓九・一四一	朝綱 子澄明に後れて嘆く
	十訓九・一四一	橘正通、具平親王家の作文の序に「齡重・顔駟」の文を書いて思を述べ、高麗に赴く
一四〇	十訓一〇・一五七	正通 高麗にて宰相となる
		齊信、東北院の念仏に、兼家（東三条）の請により齊名の「念三極樂之尊」を朗詠す

一四一 十訓一〇・一五六

村上天皇、直幹の申文の文に御不興なりしも、猶御心に深くかけ給ふ

○印は和漢朗詠集に詩が載っているもの

増補改訂 日本説話文学索引 清文堂 による

ここで気がつくことは、一〇九段から一二〇段（一一五・一一八段を除く）までの、前、三分の一の章段では、『江談抄』との類話関係が著しく見受けられることである。詳しくみてみると、『江談抄』の中でも、特に第四・第六「長句事」と関わりが深いことがわかる。これは、『江談抄』の第四及び第六「長句事」が、この『古今著聞集』の巻第四という文学篇の説話としてふさわしい性格を有しているからだともいうのであろうか。『和漢朗詠集』と何らかの関係があると認められたのは、一〇九段から一一七段（ただし一一五段を除く）の八章段であり、『古今著聞集』巻第四（文学第五）全体で十四章段であることを考えあわせると多いといえる。

次に、一二一段から一三三段までの章段に目を向けると、一つも類話関係が認められないことに気づく。これは一体どう考えるべきものであろうか。作者自身による全くの創作か。あるいは、この表には示されていない、すなわち説話文学作品以外のものを参考としたのであろうか。『和漢朗詠集』と何らかの関係があると認められたのは、一二一・一二二・一二八・一三一段の四章段である。しかし、この四章段は、『和漢朗詠集』の詩の全部ではなく、ほんの一部分しか引用していないのである。これでは、『和漢朗詠集』からの影響云々と論ずるには、少し無理が生じてしまうようにも思われる。それゆえ、この四章段は、先の『江談抄』との関係が認められた八章段などとは、別の扱いをして研究していく必要があるようだ。

そして、残る一三四段から一四一段という最後の三分の一の章段では、すべて『十訓抄』との類話関係が認めら

れることに気づく。細かく見てみると、最後の 一四一段で一話もどるものの、他の章段の説話はすべて『十訓抄』の説話配列の順にそって並んでいるのである。⁽¹⁾なお、『和漢朗詠集』と何らかの関係が認められたのは、一三九・一四〇段の二章段のみである。

二、巻第四（文学第五）について

資料一の結果をもとに、『和漢朗詠集』と何らかの関係が認められた十四章段を中心に、伝承関係を考えるため、さらに詳しく調べてみた。ここでは、『古今著聞集』との比較の対象を、説話文学作品にとどめず、あらゆる分野の作品とした。その結果、『古今著聞集』巻第四（文学第五）は、その性格によって、次のように大きく三つに分けられるのではないかと考えられる。

- (1) 『江談抄』との類話関係のみられる一〇九段から一二〇段
 - (2) 他の説話集との類話関係のみられない一二一段から一三三段
 - (3) 『十訓抄』との類話関係のみられる一三四段から一四一段
- 今回は、このうち他の説話集との類話関係のみられた章段、すなわち(1)、(3)の二つについて論じたい。

(1) 『江談抄』との類話関係のみられる一〇九段から一二〇段（資料二参照）

この部分は、『江談抄』と類話関係の認められる章段が十段と多く、そのうち『和漢朗詠集』とも関係の認められるものが八段もあり、それだけに見るべきところが多いと思われる。

△資料二△

古 今 著 聞 集	江 談 抄
<p>一〇九 天曆御時大江朝綱菅原文時をして白氏文集第一の詩を撰ばしめ給ふ事</p> <p>天曆御時、朝綱・文時におほせて、文集第一詩えらびたててまつるべきよし、勅定ありければ、</p> <p>送蕭處士遊黔南^一</p> <p>能^レ文好^レ飲老蕭郎 身似^二浮雲^一鬢似^二霜</p> <p>生計拋來詩是業 家園忘却酒為^二鄉</p> <p>鴻從^二巴峽^一初成^レ字 猿過^二巫陽^一始斷^レ腸</p> <p>不^レ醉黔中爭得^レ去 摩囀山月正蒼々</p> <p>この四韻を、ともにえらびたてまつりたりけり。一句すぐれたるはおほけれども、四句体ことなるによりて、ありがたき事にや。兩人同心の程、興あることなり。</p> <p>一一〇 源相規安樂寺作文序を書し天神御感の事</p> <p>安樂寺作文序を相規が書けるに、</p> <p>王子晋之昇^レ仙 後人立^二祠於緱嶺之月^一</p> <p>羊太伝之早^レ世 行客墜^二淚於岷山之雲^一</p> <p>この句ことにすぐれたりけるを、後に月のあかりけるに、安樂寺にて直衣の人詠じたるは、天神御感のあまりに、あらはれ給けるにや。</p> <p>一一一 橘直幹が秀句を翫然上人偽りて自作と称する</p>	<p>蘇州舫故龍頭暗。王尹橋傾雁齒斜。^{問江南景物。白。送蕭處士遊黔南。}</p> <p>江從^二巴峽^一初成^レ字。猿過^二巫陽^一始斷^レ腸。</p> <p>件詩天曆御時。朝綱文時依^レ勅撰^二進文集第一詩^一。共不相議。獻^二此四韻^一云々。申云。至^二一句^一者雖^レ有^レ勝。以備^二四韻体^一所^レ進也云々。</p> <p>王子晋之昇仙。後人立^二祠於緱嶺之月^一。羊太伝之早世。行客墜^二淚於岷山之雲^一。相規。</p> <p>件句後人於^二安樂寺^一月夜窃見^レ之。有^二直衣人^一被^レ詠云々。若天神令^レ感給歟云々。</p>

事

「蒼波路遠雲千里。白霧山深鳥一声。」此句は、橋直幹が秀句にて侍を、齋然上人入唐の時、わが作なりと称しけり。但雲千里と侍を霞千里とあらため、鳥一声をば虫一声となをしかりけるを、唐人きゝて、「佳句にて侍る。おそらくは雲千里、鳥一声と侍らばよかりなまし」とぞいひける。さしもの上人の、いかにそらごとをばせられけるにか。この事おぼつかなし。

一二 渤海の人大江朝綱が秀句に感涙を流す事

「前途程遠。馳思於雁山之夕雲。」後会期遙。霑纓於鴻臚之曉淚」と、後江相公かきたるをみて、渤海の人感涙をながしける。のちに本朝人にあひて、「江相公三公の位にのぼれりや」と問ひけり。しからざるよし答ければ、「日本国は賢才をもちゐる国にはあらざりけり」とぞはちしめける。

一二三 都良香竹生島に参りて作詩し弁財天の夢の告を蒙りて下句を得る事

都良香、竹生島にまいりて、「三千世界眼前尽」と案じ侍て、下句を思わづらひ侍けるに、その夜の夢に弁才天、「十二因縁心中空」とつけさせ給ける、やむことなき事也。

一二四 源為憲が土囊の事

「晴後山川清」といふことを、以言つかうまつりけるに、「帰嵩鶴舞日高見、飲渭龍昇雲不殘」とつくりて、以言

蒼波路遠雲千里。白霧山深鳥一声。橋直幹石山作。
齋然入唐。以三件句稱己作。以雲為霞。以鳥為虫。
唐人称云。可謂佳句。恐可作雲鳥。

前途程遠。馳思於雁山之暮雲。後会期遙。霑纓於鴻臚之曉淚。於鴻臚館北客。詩序。後江相公。

此句渤海之人流涙叩胸。後經數年。問此朝人曰。江朝綱至三公位乎。答云未也。渤海人云。知日本国非用賢才之國云々。

三千世界眼前尽。十二因縁心裏空。晚夏遊竹生島。述懷。都良香。
故老伝云。下七字作者難思得。嶋王弁才天才告教之。

帰嵩鶴舞日高見。飲渭龍昇雲不殘。晴後山川清。以言。

件以言詩。被講之時。以言即為講師。読三件句之時。帰嵩二字。飲渭二字。音連説之。若有其由歟云々。為憲

すなはち講師にてよみあげたるを、為憲朝臣、其座に待るが
聞て、土囊に頭を入れてなみだをながしけり。みる人或は感じ、
或はわらひけり。彼為憲は、文場ごとに囊に抄物を入れて隨身
しけるを、土囊とは名づけたりけり。

一一六 元稹が秀句の事

「不_レ是花中偏愛_レ菊。此花開後更無_レ花。」これは元稹が秀
句也。隱君子、琴を弾じ給ける空より、かげのやうなるもの
きたりていひけるは、「我此句をあいす。宿執あるによりて
其感にたへず。但後の字をあらためて とあるべし」といひ
てうせにけり。

一一七 鬼神菅原文時の家を拝する事

いづれの年にか、天下に疫病はやりたりけるに、或人の夢
に、文時三品の家のまへを、おそろしげなる鬼神ども、みな
拝してとをりけるを、「あれはなにといふことにて、かくは
かしこまるぞ」ととひければ、「隴山雲晴、李將軍之在家、
とつくりたる人の家をば、いかでかたゞ無礼にて過べき」と
こたへけり。鬼神は心たしかにて、かく礼儀もふかきにより
て、文をもうやまふにこそ。一道に長ぜる人は、むかしもい
まも、かやうのふしぎおほく侍り。

朝臣同在其座。件朝臣每_二文場所隨身之囊。名曰_二書
囊。此入_二抄筆之器也。聞_レ講_二此詩不堪_二情感。入_二頭於
囊而涕淚數行。時人或感或笑云々。慶滋。為政同在此
座。後日難曰。此詩犯_二忌諱龍昇字。尤可_レ避_レ之。是黃帝
登避事也云々。以言聞_レ之微笑。不_二敢陳_二一言。大略不_レ
足_レ言賦。

不_二是花中偏愛_レ菊。此花開後更無_レ花。十日菊。元。

隱君子鼓_レ琴時。元稹靈託_レ人稱曰。件詩開尽也。後字不_レ
可_レ然。或謂。嵯峨隱君子吟_二此詩彈_レ琴。從_レ天如_レ絲者下
來云。我自愛_二此句之貴。其靈依_レ有_二宿執。聞_レ琴不_レ堪_二甚
感。

隴山雲暗。李將軍之在家。額水浪閑。蔡征虜之未_レ仕。清慎
公辭_二文時_一狀。

或人夢。行役神依_二此句。不_レ弘_二於文時家云々。

①『江談抄』との関係

この部分が『江談抄』と類話関係にあることは、すでに資料一によりわかっていたが、調べていくと、単に「似た話」ではなく、密接な関係が認められた。特に、一〇九・一一〇・一一二・一一四段などは、『江談抄』を除く他の文献からだけでは、話を作るのは不可能と思われる。また、残る四章段も、他の文献に何とか話のものになりそうな要素がないこともないが、やはり『江談抄』を見た方が考えた方が無理がないように思われるのである。以上のように考えてみると、両者は単なる類話関係ではなく『古今著聞集』は『江談抄』を出典としているといえる。つまり、永積安明氏も指摘されているように、『江談抄』を直接典拠としながら適宜文章を改め和文化したものと考えられるわけである。ここで私は、この「適宜文章を改め」というのを、単に言い回しを変えただけではなく、何かもつと意義のあるものと考えたい。たとえば、一〇九段の最後の一文「兩人同心の程、興あることなり。」、「一一一段の「さしもの上人：」以下、一一三段の最後の「やむごとなき事也。」、一一七段の「鬼神は：」以下は、『江談抄』にはまったく見られない部分である。これは、説話評論とはいえないまでも、感想を加えることにより、単なる『江談抄』からの引用にとどまらず、さらに話を発展させておもしろくしようとした『古今著聞集』の作者の苦心によるものではないかと思われるからである。このことを、西尾光一氏は、「説話が追憶・感嘆の気持ちから発想されており、『著聞集』の基本的な心情傾斜である」とされている。また、序や跋文に、あれほど作者の説話集を編纂する強い意欲がみられる『古今著聞集』であることを考えあわせても、決して単なる『江談抄』からの引用とは言えないような気がする。

そもそも、『古今著聞集』が『江談抄』を出典としているというのは、序に

夫著聞集者、宇縣亞相巧語之遺類、江家都督清談之餘波也。

とあることから納得できる。これによって、結果としてたまたま『江談抄』を出典とするようになったのではなく、編纂の方針として、このことは最初から貫かれていたのではないかと考えられる。『江談抄』をよくみてみると、第一公事・撰関家事・仏神事、第二雑事、第三雑事、第四（欠題だが漢詩に関する事）、第五詩事、第六長句事という部立てになっている。『古今著聞集』が、やはり神祇第一、釈教第二、政道忠臣第三、公事第四、文学第五……という部立てを重視している点からも、『江談抄』を手本としたのであろうと考えられる。

また、この巻第四（文学第五）は漢詩文を扱っており、同じく漢詩文をとりいれた説話という点でも、『江談抄』と関わりが生じてくると思われる。西尾光一氏は、このことを「『漢詩文』説話の背景」として、「日本の漢詩文は、八世紀の『懷風藻』から十一世紀の『本朝文粹』・『和漢朗詠集』へと宮廷の知識人によるすぐれた述作を残しているが、その伝承を纂集したものに『菅家文草』巻七・巻十二、『江談抄』第四・第六（類従本）などがあり、『著聞集』巻四文学篇はそれにつぐものである。」とされている。

②説話配列の年代順について

さて、この部分では、『江談抄』との関係の他にもう一つ注目すべき問題があると思われる。それは、説話配列の年代順についてである。『古今著聞集』では、作者が序や跋文に「篇のはし／＼に、いさ／＼かそのこと（お）のをこりをのべて、つぎ／＼にそのものがたりをあらはせり。」と述べているように、編纂上の構成には実に整然としたものがある。もちろん、年代順配列も基本的原則であり、『古今著聞集』を語る際の大きな特色の一つである。ところが、今まで見てきた部分に、いくらか疑問に思うところがあったのである。そこで、話の中心事件や登場人物の生没年代などをもとに、いつごろの話かを見直してみる。

一〇九 「天曆の御時」や「朝綱」「文時」の生没年代から、だいたい九五〇年前後

一一〇 この句の制作年時などから考えて、だいたい九六四年以後

一一一 齋然上人の入唐が永観元年すなわち九八三年であり、そのころの話

一二二 朝綱が使者を見送った延喜八年（九〇八）六月以後、朝綱が没する天徳元年（九五七）ころまでの話

一二三 都良香の生没年代だけから考えても、承和元年（八三四）から元慶三年（八七九）までの話

一四 以言と爲憲の生没年代から考えあわせて、だいたい一〇〇〇年前後の話

（一二五）後徳大寺左大臣が前大納言の時、嘉応二年（一一七〇）の説話

一二六 主要登場人物である隠君子の時代から八九〇年ころ

一二七 菅原文時が天元四年（九八一）没であることより、それ以前の話

以上のように、初めの四章段は、すべて九五〇年以降一〇〇〇年以前の話である。ところが、続く一一三段は、都良香に関する説話であり、前の四章段と著しく年代が逆行することになる。あれほど説話の年代配列に慎重なこの『古今著聞集』の作者が、百年も年代を乱すというこんな不手際をおかすであろうか。そこで、この章段は、もしかすると原著の発想や主題を了解できなかった後人の手によるものではないかという新たな問題が生じてくるのである。続く一一四段は、年代的に前段の一一三段よりもむしろその前の一二二段に連続しているといえる。それゆえ、一層一一三段は抄入ではないかと思われる。そこで、考えられるのが、永積安明氏も指摘されているように、まったく『古今著聞集』の作者の関わり知らないところの後人が、一〇九段から一二二段まで、四段にわたって『江談抄』に典故を求めうる諸段が連続しているので、あるいはそれにひかれて同じく『江談抄』にもとづいて追記したものではないだろうかということである。『和漢朗詠集』と関係が認められないので、今回は研究の対象

から除外した続く一一五段は、年代順配列を考えるために少しだけとり上げてみると、この位置では非常に不自然であることがわかる。以下永積氏のご論考に準拠しつつ論述を進めていきたい。年代順配列だけを考えるなら、同じく後徳大寺治承元年（一一七七）時代の説話を扱った十四段後の一二九段に接続させるべきである。また、この章段は、珍しく『江談抄』を典拠としていないこともあり、一一四段が文場に抄物を持参した説話であるのにひかれて、同じく抄物持参の例話を追記するという後人のしわざではないかと考えられるのである。続く一一六段は、主要登場人物の隠君子の時代が、著しく配列の年代順を乱していることがわかる。その上、主題の詩の作者元稹は、唐の詩人である。『古今著聞集』序には、

不_三敢_テ窺_ハ漢家經史之中_一。有_リ三世風人俗之製_一矣。

とあり、そこから考えても編成の主旨にそわないことになる。そこで、この段も著者の関与しない追記であろうと考えられるのである。今回研究の対象とした最後の章段である続く一一七段は、一一五・一一六段を除外して、むしろ一一四段と年代的に近いことになる。今回とりあげなかった残る一一八・一一九・一二〇段は、年時については特に問題はない。以上のようにみてきた結果、抄入に関しては一一三・一一五・一一六段が該当するのではないかと考えられるが、あくまで年代順配列だけという根拠に乏しいもので、決して断定はできないと思われる。

(3) 『十訓抄』との類話関係のえられる一三四段から一四一段（資料三参照）

すでに資料一でみてきたように、『十訓抄』と類話関係の認められた章段は、後の一三四段から一四一段までの八段であり、しかも最後の一段を除いて、すべて『十訓抄』の説話配列の順にそって並んでいる。ここでは、『和漢朗詠集』と関係の認められた章段は一三九段と一四〇段のみであるが、この二章段を中心に考えていきたいと思

う。

△資料三▽

古今著聞集	十訓抄
<p>一三四 枇杷大納言延光の夢に村上天皇御製を賜ふ事 邑上帝、かくれさせ給て後、枇杷大納言延光卿、あさゆふ 恋しく思たてまつりて、御かたみの色を、一生ぬぎ給はざり けり。ある夜の夢に御製をたまひける。</p> <p>月輪日本雖_二相別_一 温意清涼昔至誠 兜率最高_二婦_二内院_一 如今於_レ彼語_二卿名_一 大納言、夢さめておどろきて、これに和したてまつる。</p> <p>并_二拜聖顔_二一寢程 恩言芳處奏_二中情_一 夢中如_二覺_二夢中事_一 雖_レ尽_二一生_二豈空驚_一 一三五 後三条院御秀句の事</p> <p>後三条院、東宮にておはしましける時、学士実政朝臣任国 におもむきけるに、餞別のなごりをゝしませ給て、御製かゝ りけるとかや。</p> <p>州民縦作_二甘棠詠_一 莫_レ忘_二多年風月遊_一 此心は毛詩云、「孔子曰、甘棠莫_レ伐_二邵伯之所_レ宿也_一」と、 いへることなり。</p> <p>一三六 中納言顯基出家道心の事</p> <p>中納言顯基卿は、後一條院ときめかし給て、わかくより、</p>	

つかさくらゐにつけてうらみなかりけり。御門にをくれたてまつりにければ、「忠臣は二君につかへず」といひて、天台楞嚴院にのぼりて、かしらおろしてけり。御門かくれ給ける夜、火をともしざりければ、いかにとたづぬるに、主殿司、新主の御事をつとむとて、まいらぬよし申けるに、出家の心もつよくなりけり。この人わかく道心おはしまして、つねのことぐさには、

古墓何世人

不知_レ姓與_レ名

化為_二路辺_一土

年々春草生

一三七 菅丞相太宰府に左遷の後恩賜の御衣を拝して作詩の事

菅丞相、昌泰三年九月十日宴に、正三位の右大臣の大將にて内に候はせ給けるに、

「君富_二春秋_一臣漸老。恩無_二涯岸_一報猶遲」とつくらせ給ければ、叡感のあまりに、御衣をぬぎてかづけさせ給しを、同四年正月に、本院のおとどの奏事不実によりて、俄に太宰権帥にうつされ給しかば、いかばかり世もうらめしく、御いぎどをりもふかゝりけめども、なを君臣の礼はわすれがたく、魚水の節もしのびえずやおぼえさせ給けん、みやこのかたみとて、彼御衣を御身にそへられたりけり。さてつぎの年の同日、かくぞ詠ぜさせ給ける。

去年今夜侍_二清涼_一

秋思詩篇独断_レ腸

恩賜御衣今在_レ此 捧持毎日拜_三餘香_一

一三八 大江朝綱が願文秀句の事

後江相公の澄朝にをくれて後、後世をとぶらはれける

願文に

悲之亦悲莫_レ悲_三於老後_二子

恨而更恨莫_レ恨_三於少先_二親

とかけるこそ前後相違の恨、げにさこそはと、さがたくあはれにおぼゆれ。

一三九 橘正通作文序に述懐の事

橘正通が身のしづめる事を恨て、異国へ思たちける境節、具平親王家の作文序者たりけるに、これを恨とや思けん、

齒垂_三顏駟_一 過三代_二而猶沈

恨同_二伯鸞_一 歌_三五噫_二而欲_レ去

とぞかけりける。源為憲、其座に候けるが、此句をあやしみて、「正通おもふ心ありてつかうまつれるにや」と申ければ、さすが心ぼそくや思けん、涙をながしけり。さてまかりいづるまゝに、高麗へぞゆきにける。世を思きらんには、かくこそ心きよからめと、いみじくあはれなり。かしこにて宰相になされにけりとぞ、後にきこえける。

一四〇 民部卿齊信齊名が秀句を朗詠の事

東三條院関白前太政大臣、九月十三夜の月に、東北院の念仏にまゐり給へるに、夜もうちふけて、世中もしづかなる程

橘正通が身の沈める事を恨て、異国へ思立たる折ふし。具平親王家の作文序書たりけるに、是をかぎりとおおもひけむ。

齒垂_三顏駟_一 過三代_二而猶沈

恨同_二伯鸞_一 哥_三五噫_二而將_レ去

とぞかけりける。源為憲其座に候けるが。此句をあやしみて。正通思心有て仕つれるにやと申ければ。さすが心細くや思ひけん涙をながしけり。さてまかり出るまゝに。高麗へぞ行ける。世を思ひきらんには。かくこそ心きよからめといみじくあはれ也。かしこにて宰相になされにけりと後に聞えけり。

東三條関白前太政大臣九月十三夜の月にさそはれて。東北院の念仏に参給たりけるに。夜打更て世中もしづかなるほどに。齊信民部卿をめして。こよひたゞはいかゞやまん。朗

に、齊信民部卿をめして、「こよひたどにはいかゞやまん。朗詠ありなんや」と仰られければ、いとかしこまりて、しばしわづらふけしきなるを、人々耳をそばたてゝ、いかなる句をか詠ぜんずらんと待程に、「極楽の尊を念ずる事一夜」とうちいだしたりける、たぐひなくめでたかりけり。此句かきたる齊名、やがて御ともにさぶらひけり。我句をしも、さばかりの人の朗詠にせられたりける、いかばかり心の中のだしかりけん。此句は勸学会の時、撰念山林を賦する序なり。

念極楽之尊一夜 山月正円

先勾曲之会三朝 洞花欲落

これは三月十五夜の事也。九月十三夜に詠ぜられける、いかにおぼゆ。但念仏の儀ばかりにとりよれるにや。古人之所作、仰而可レ信歟。

一四一 村上天皇直幹が申文を惜しみ給ふ事

天曆御時、橘直幹が民部大輔をのぞみ申ける申文を、草をばみづからかきて、小野道風に清書せさせけり。御門敷覧ありければ、「依レ人而異レ事。雖レ似偏頗代天而授レ官。誠懸運命」など、述懐の詞をかきすぐせるによりて、御氣色あしかりけり。人これをおそれおもふ處に、其後内裏焼亡ありて、俄に中院へ御ゆきせさせ給けるに、代々の御わたりもの・御倚子・時簡・文象・鈴鹿以下もてまいりたるを御覧じ

詠有なんやと仰られければ。いと畏て暫わづらふ氣色なるを。人々耳を時て。いかなる句をか詠ぜんずらんと待ほどに。極楽の尊を念ずる事一夜と打出したりける。類なくめでたかりけり。此句書たる齊名やがて御供に候けり。我句をしもさばかりの人の朗詠せられたりける。いかばかり心の中のだしかりけん。此句は勸学会の時、撰念山林を賦する序也。

念極楽之尊一夜 山月正円。

先勾曲之会三朝。洞花欲落

是は三月十五夜の事也。九月十三夜に詠ぜられけるいかゞとおぼゆ。但念仏の義ばかりに取よれりけるにや。古人之所作仰而可レ信歟。

「直幹が申文はとりいでたるや」と御尋ありける、時の人い
みじき事にぞ申ける。

『十訓抄』 新訂増補国史大系 第十八卷

①『十訓抄』との関係

まず、一三九・一四〇段ともに『十訓抄』とほぼ同文であるといえる。しかし、これは、先の『江談抄』との類話関係のところでも論じたような、出典としてさらに話をふくらませて云々という作者の手の加わったものではない。単に引いただけのものと考えられよう。ここで、一つ問題が生じてくる。『古今著聞集』では、序に

夫著聞集^{トイハ}者、宇縣^{ウヘ}亞相巧語之遺類、江家都督清談之餘波也。

とあるように、『江談抄』との類話（出典）関係がいくらか認められることは、すでに(1)『江談抄』との類話関係で述べたとおりである。しかし、他の説話集との関係となると、西尾光一^{（一）}氏も指摘されているように、跋に「家々の記録をうかがい」、序に「聊^{イササカニ}又兼^又實錄^{實録}」とあり、歴史的により確実な説話の集を自力でつくり上げようとしたため、王朝の日記や記録を資料とすることはあったものの、現存の平安朝や鎌倉初期の説話集を出典とするものは少ないのである。また、(1)においては、確かに『江談抄』との類話関係は認められたが、直接典拠としながら適宜文章を改め和文化することをはじめとして、序や跋に作者の説話集を編纂する強い意欲がみられるように、説話評論とはいえないまでも最後に一文加えることによって話をさらに発展させておもしろくしようとする苦心がみられ、単なる引用というのは、まず認められなかった。しかるに、この一三九・一四〇段において、ほぼ一文一句

と違わない、まさに『十訓抄』から何も手を加えられずに引用されたと断定できるような結果が認められたのは、いったいどういうことであろう。そこで考えられるのが、すでに一一三・一一五・一一六段で論じたような、もしかすると作者の関与しないところの後人による抄入ではないかという問題である。

ここで、『古今著聞集』と『十訓抄』との関係について少し触れておくことにしよう。そもそも両書は、古くからよくその伝承関係が論じられてきた。というのも、両書が八十余話を共有すること、『十訓抄』が一二五二年、『古今著聞集』が一二五四年という近い成立年代にあることなどによるもので、『十訓抄』の作者が橘成季ではないかとされていた時代もあったというほど、両者の伝承関係は強く信じられてきた。しかし、近年『古今著聞集』と『十訓抄』との関係は、きわめて希薄だと論じられるようになってきた。それは、今まで強い関係があるとされてきた部分が、実は作者成季の手によるものではなく、後人の追記ではないかと言われるようになってきたからである。今では、『古今著聞集』の成立した建長六年（一二五四）十月から、現存本の奥書にある暦応二年（一三三九）までのどこかの時点で、一人もしくは何人かの手によって、建長の原形本にあった筈のない約八十話が抄入追記されたと認められている。⁽⁸⁾その決め手としては、先の『江談抄』との類話関係のところでも問題となった『古今著聞集』構成の基本的な原則である年代順配列を乱していること、篇末などに典故とほぼ同文の説話が集め並べられていることが指摘されている。中でも永積安明氏は、今問題にしている『十訓抄』からの抄入によるものが最高で、六十一段だとされている。『十訓抄』からの抄入について、『古今著聞集』巻第四（文学第五）の範囲内で細かく検討してみたい。

まず、抄入だと考えられる根拠の一つとして、前にも述べたが、『十訓抄』と類話関係の認められる一三四段から一四一段までの最後の一段を除いて、すべて『十訓抄』の説話配列の順にそって並んでいることがあげられよ

う。先の『江談抄』との関係が認められた一〇九段から一二〇段における部分では、出典となった『江談抄』は第四、第五詩事、第六長句事の範圍内に限られはしたが、その配列は整然としたものではなかった。おそらく、それは、『古今著聞集』の本物の作者が『江談抄』を典拠とするにしても、十分に配慮して自己の編纂意図に一番適するような用い方をしたからだと思う。そうしてできた『古今著聞集』が『江談抄』の説話配列と異なったのは当然の結果といえよう。これに対して、今問題にしている『古今著聞集』の一三四段から一四一段では、最後の一段で逆もどりがあるものの、他の七段ではすべて『十訓抄』の配列の順にそって並んでおり、永積氏も指摘されているように、『著聞集』の追補者が『十訓抄』を座右におき、巻初から巻末へむかって逐次後段に及びつつ、順次これを抄入したことを示すものほか考えられないであろう。ちなみに氏の研究によると、この傾向は文学篇にかぎらないということである。

②説話配列の年代順について

次に、一三四段から一四一段を、(1)『江談抄』との類話関係の時のように、話の年代を考えることから調べてみたい。

- 一三四 村上天皇が亡くなられたのが康保四年（九六七）であり、それ以後の話
- 一三五 後三条院が、学士実政が任国へ赴く時に、歌を作られた話で、だいたい一〇六四年ころの話
- 一三六 中納言顯基が出家した話で、一〇三六年ころの話
- 一三七 菅丞相すなわち菅原道真に関する話で、本文にもあるようにだいたい昌泰三年（九〇〇）ころの話
- 一三八 後の江相公の話で、九五七年以前の話

一三九 橘正通に関する説話で、具平親王の生没年代などから、十世紀後半もしくは十一世紀はじめの話

一四〇 奇信が出てくることなどから一〇三〇年ころの話

一四一 冒頭に天曆の御時とあるように、だいたい九五〇年ころの話

まず、前段の一三三段まで（すなわち一二一段から一三三段）の年代をみてみると、平安時代の終わりのころの話である。これにより一三四段の話は、一三三段までの話の年代進行から著しく逆行することがわかる。次に、年代順の乱れ方には、永積氏も指摘されているように、二重の問題があることがわかる。一つは、『江談抄』との類話関係が認められた一二〇段までの章段が九五〇年から一〇〇〇年ころの話であり、次の一二一段から一三三段では平安朝の終わりという前の章段から年代的に続いた話であったのに、『十訓抄』との類話関係が認められるこの八章段の部分の最初の章段一三四段で、それまでの年代進行から著しく逆行してしまふことである。もう一つは、一三四段から一四一段という八章段が、またその中で年代順を乱すということである。もっとも、『十訓抄』という作品自体が、ある部分は年代順説話配列だが、正確ではなく、同類説話の配列が根本原則であり、そこから写すとなれば仕方のない結果であらう。以上のようにみると、あれほどしっかりした説話集の編纂意図をもち、年代順配列に慎重であった作者が、『古今著聞集』のこの部分にきて、急に年代順を激しく乱すようなことはまずしないだろうと考えられる。やはり、原著の発想や主題を了解できなかった後人の手による抄入とみるべきであらう。

③ 一四〇段の内容から

具体的に内容を見ても、抄入が考えられるいろいろな問題が見受けられる。たとえば、一四〇段についてみる

と、永積氏も指摘されているが、文中の「東北院」の右側に、「私云東北院、兼家公孫女上東門院建立也時代相違不審」と記しているように、この段の主人公を東三条院藤原兼家とすれば時代があわない。ここは、『今鏡』にあるように、兼家ではなくて宇治殿頼通でなければならない。時代的にみて、『古今著聞集』は『今鏡』を、さらにこれらのことを正しく記した書物を見る機会は十分あったにもかかわらず、『十訓抄』の間違いをそのままとりいられているというのは、やはり『十訓抄』をそのまま写したという証拠になろう。このことは、単に後人による『十訓抄』からの抄入を示すのみでなく、抄入者は追記という作業ばかりに氣をとられ、肝心である原著の発想や主題を了解できなかったこともいえると思う。しかし、何よりもいえることは、永積氏も指摘されているように、これらの諸段は、抄入にあたって、原拠たる『十訓抄』の文脈から脱却できなかったために、形式的には漢詩文を含む説話でありながら、実質的には文学篇の説話になりきっていないものが多いということである。

以上のように、『古今著聞集』巻第四（文学第五）における最後の『十訓抄』と類話関係の認められた一三四段から一四一段について検討してみた。資料一によりすでに類話関係のあることはわかっていた。しかし、このように詳しく検討してみると、同じ類話関係とはいえないものの、先の『江談抄』の場合とはまったく事情が異なることがわかった。この部分では、類話がみられるのは後人によるほとんどそのままの抄入のためである。それゆえ、結果として形式的に漢詩を含むだけで、実質的には文学譚になっていない。これでは当然原著の発想や主題を了解できてはいないのであるから、先の作者自身が典拠とした『江談抄』との類話関係の場合とは、やはり切り離して考えるべきであろう。したがって、これだけの研究では『古今著聞集』全体については何ともいえないが、少なくともこの巻第四（文学第五）を見るかぎりでは、『古今著聞集』と『十訓抄』との関係は希薄だといえよう。

むすび

今回の研究でわかった『古今著聞集』巻第四（文学第五）の性格を、大きくまとめてみたいと思う。

第一に、『和漢朗詠集』との関係がはじめは著しく認められたが、研究を進めていくにつれ、予想に反して、直接関係はまずないことが明らかになった。しかし、王朝時代を思慕した作者のこと、『和漢朗詠集』はきつと作者の意識の上にはあったと思われる。

第二に、資料一で類話関係の認められた前の三分の一の部分の『江談抄』との関係は、実は出典であった。これは、序にある「江家都督清談之餘波」からもうかがえる、作者の編纂意図として貫かれていたわけである。

第三に、『十訓抄』との関係である。資料一で類話関係はみられたものの、調べていくと、①説話配列が『十訓抄』のそれにまったくそっていること、②作者の編纂意図の一つである年代順配列が大きく乱れていること、などから、原著の発想や主題を了解できなかった後人の手による抄入ではないかと考えられる。従来関係が深いとされてきたが、ここだけをとっても実は両者の関係は希薄であったことがわかる。

以上のようにみてくると、巻第四（文学第五）はわずか三十六章段の巻だが、編纂意図を貫いていることなどをはじめとして、実に『古今著聞集』全体に通じる性格を有しており、みるべきところが多いと思われる。しかし、当初興味を持ったわりに研究の進んでいないことを思い出すと、この部分にもこれがおそらくその原因になっているのだろうと思われるところがある。それは、説話の中に『和漢朗詠集』の名句をとり込んだり、史実を用いることによって、王朝時代への思慕を表そうとするのはわかるが、どちらかというと作者の気持ちばかりが先に立って

いるように感じられることである。すなわち、文学篇でありながら文学篇にふさわしくない説話となっていたりして、「文学」としての魅力に少々欠けるからではないだろうかということである。さらには、作者の編纂意図にそわない後人の手による「抄入」も、拍車をかけているといえよう。

『古今著聞集』に対して、従来の説話文学作品の見方から一歩進んだものが解明されれば、まだまだ潜んでいる多くの魅力もきっと理解されてくるに違いない。

〈注〉

- (1) 永積安明氏も『古今著聞集』（日本古典文学大系 84 岩波書店 昭和41）の解説他で指摘されている。
- (2) 『古今著聞集 上』（新潮日本古典集成（第五十九回）新潮社 昭和58）p 501の「巻第三」に関連した論述のところによる。
- (3) 『古今著聞集 上』p 192頭注。
- (4) 『古今著聞集』補注より。
- (5) 『古今著聞集』及び「古今著聞集の本文批評」によった。
- (6) 『古今著聞集』補注 p 563で永積氏も指摘されている。
- (7) 『古今著聞集 上』p 487より。
- (8) 『古今著聞集 上』p 491より。
- (9) 『古今著聞集』解説 p 35より。
- (10) 『古今著聞集』解説 p 31による。
- (11) 『古今著聞集』解説 p 32及び「古今著聞集の本文批評」によった。